

丸山遺跡

2012

津和野町教育委員会

例 言

1. 本書は、津和野町教育委員会が2001（平成13）年度に実施した、鳥取県鹿足郡津和野町森村^{ヒラタケ}字^{シロ}994-1・994-2・995・1002に所在する丸山遺跡の本発掘調査の報告書である。

2. 発掘調査の体制は下記のとおりである。

2001（平成13）年度 発掘調査年度

調査主体	津和野町教育委員会	教育長	齋藤 敦弘
事務局		教育次長	齋藤 誠
		教育次長	廣石 修
		文化係	山本 博之
調査員		文化係	宮田 健一
調査補助員		嘱託	永田 茂美
整理作業員		臨時職員	椋木 牧子
発掘作業員		板垣道也、伊藤実、栗田定至、坂本雄語、清水勝、長嶽三千子、増田朋弘	

2011（平成23）年度 報告書作成年度

調査主体	津和野町教育委員会	教育長	齋藤 誠（～2011年12月5日）
		教育長	本田 史子（2012年3月1日～）
事務局		教育次長	世良 清美（2011年12月6日～2012年2月29日、兼教育長職務代行者）
		教育次長補佐	齋藤 道夫
		文化財係長	鶴尾 鶴
調査員		文化財係	宮田 健一
調査補助員		嘱託	永田 茂美、椋木 牧子
整理作業員		臨時職員	山本 達（2011年10月3日～12月29日）

3. 報告書作成にあたっては、下記の方々にご指導いただいた。この場を借りてお礼申し上げます。（敬称略、順不同）

永尾隆志（山口大学大学院理工学研究科教授）

村上 勇（奥田元宋・小由女美術館館長）

4. 調査にあたっては、下記の関係者の方々にご協力いただいた。この場を借りてお礼申し上げます。（敬称略、順不同）

勝間利明、椿芳衛

5. 基準点測量業務については有限会社スギハラ測量（当時）に委託した。

6. 本書に用いた方位は第3図のみ真北であり、他は国土調査法第Ⅲ座標系（日本測地系）に基づく座標北である。

7. 調査遺跡を示す略号は下記を用いた。

M R Y - 1（丸山遺跡第1次調査）

8. 遺構等を示す略号は下記を用いた。

S K : 土坑、S A : 柱穴列、S P : 柱穴・ピット、T R : レンチ、G : グリッド、T P : テストピット（試掘坑）

9. 調査に伴う記録類及び出土遺物は、津和野町教育委員会で保管している。

10. 本書は永田・椋木・山本達の協力のもと、宮田が編集にあたった。

本文目次

第1章 調査の経過	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 発掘作業の経過	2
第3節 整理等作業の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の方法と成果	5
第1節 調査の方法	5
第2節 程序	5
第3節 遺構	6
第4節 遺物	9
第4章 自然科学分析	13
丸山遺跡における自然科学分析	渡辺正巳(文化財調査コンサルタント(株))
第5章 総括	18
報告書抄録	

挿図目次

第1図 工事予定図と調査範囲図 (1/1,000)	1
第2図 調査位置図 (1/10,000)	2
第3図 周辺遺跡位置図 (1/25,000)	3
第4図 C区土層断面図 (1/60)	5
第5図 D区土層断面図 (1/60)	5
第6図 調査区遺構配置図 (1/180)	6
第7図 S A 1 (1/60)	7
第8図 S K 1 (1/30)	7
第9図 S K 2 (1/30)	7
第10図 S K 3 (1/30)	8
第11図 S K 4 (1/30)	8
第12図 S K 5 (1/40)	9
第13図 S K 6 (1/30)	9
第14図 S K 3出土遺物 (1/4)	10
第15図 S K 5出土遺物 (1/4)	10
第16図 包含層出土遺物① (1/4)	11
第17図 包含層出土遺物② (1・2:1/2、3~5:1/4)	11
図1 試料採取地点	13
図2 花粉ダイアグラム	14

表 目 次

第1表 遺物観察表	12
表1 花粉組成表	14
表2 微化石検査結果	15

図 版 目 次

図版1	
丸山遺跡周辺の航空写真 (南より)	
図版2	
調査前 (北東より)	
表土除去工事風景 (北東より)	
A区完掘状況 (東より)	
調査前 (西より)	
A区SK2発掘状況 (南西より)	
図版3	
A区SK1、SP13・15発掘状況 (北西より)	
B区SK5発掘状況 (北より)	
B区SK3発掘状況 (南より)	
B区SK4発掘状況 (南東より)	
B区SK5発掘状況 (東より)	
B区SK5発掘状況 (西より)	
図版4	
B区完掘状況 (北より)	
図版5	
B区SK5東邊の列石 (南西より)	
B区SK6、SP32発掘状況 (東より)	
D区発掘作業風景 (西より)	
D区北壁土刷断面 (南西より)	
C区検出状況 (北東より)	
D区遺構検出状況 (北東より)	
D区微化石分析サンプル土採取地点 (南より)	
図版6	
全区完掘状況 (北東より)	
図版7	
SK3出土遺物	
SK5出土遺物	
図版8	
SK5出土遺物	
包含層出土遺物	

第1章 調査の経過

第1節 調査にいたる経緯

津和野町森村地内において町道畦田線道路新設改良工事が計画され、事業主体である津和野町建設課から津和野町教育委員会に対して、工事計画地内の文化財の有無について照会があった。工事計画地内は、周知の遺跡である「丸山遺跡」に含まれる可能性があったことから、遺跡の残存状況を確認するための試掘確認調査が必要であることを回答し、平成9（1997）年度に文化庁、島根県の補助を受けて試掘確認調査を実施することになった。試掘確認調査の結果、一部調査区で弥生～古墳時代の遺構・遺物が残存していることが明らかとなり、津和野町建設課と津和野町教育委員会で協議を重ねた結果、工事実施前に本発掘調査を実施することになった。本発掘調査は津和野町の直営事業として実施し、平成13（2001）年度に実施した。



第1図 工事予定図と調査範囲図 (1/1,000)

第2節 発掘作業の経過

はじめに、調査対象地の表土等除去掘削工事を有限会社岩本工務店（当時）に委託して実施した。また、発掘作業に先立って基準点測量業務を有限会社スギハラ測量（当時）に委託して実施した。その後の本発掘調査は7月30日～9月6日におこなった。なお、調査終盤には文化財調査コンサルタント株式会社に委託してサンプル土を探取し、微化石分析業務をおこなった。

第3節 整理等作業の経過

調査年度には並行して遺物水洗作業等をおこない、その後、本報告までに随時、遺物注記・接合・選別・実測・写真撮影等をおこなった。なお、平成23年度には、山口大学大学院理工学研究科永尾隆志教授に石材同定、奥田元宋・小由女美術館 村上勇館長に陶磁器鑑定の調査指導をしていただいた。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

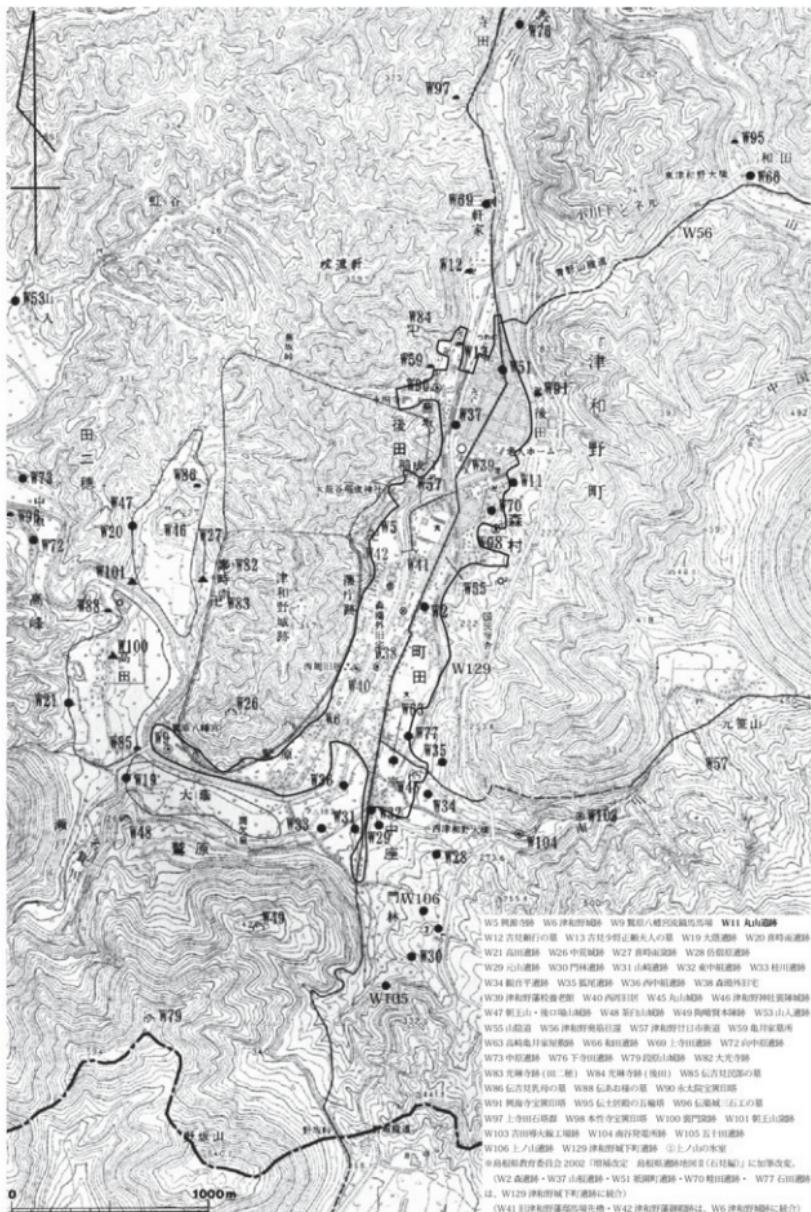
丸山遺跡は、島根県鹿足郡津和野町森村字丸山に所在する。青野山の西麓の段丘上に位置しており、北西側の段丘下は津和野川が流れている。遺跡からは、現在市街地となっている津和野盆地を見下ろすことができる。調査地付近の標高は約175～180mであり、眼下の津和野川右岸付近からの比高は約20mである。

第2節 歴史的環境

津和野の歴史は、これまでのところ確実には縄文時代早期にまで遡り、高田遺跡、山崎遺跡等からは押型文土器等が出土している。また、高田遺跡からは中期の阿高式、後期中頃の鐘崎式土



第2図 調査地位置図 (1/10,000)



第3図 周辺遺跡位置図 (1/25,000)

器が発見され、対岸の大蔭遺跡からは後期後半の太郎迫式土器が出土するなど、当時この地域が九州地方の情報の及ぶ範囲であったことが窺える。

縄文時代後期半から弥生時代初頭にかけての遺跡が大蔭遺跡で発見されており、山間部の小さな盆地である当地にも初期の弥生文化が及んでいたことが明らかとなっている。弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての集落は、高田遺跡・大蔭遺跡で確認されている。段丘上にあつた竪穴住居跡が数時期にわたって建て替えられていったことが明らかとなっている。古墳時代の集落は不明な点が多いが、町内の古墳としては、津和野川最上流の木部地区において鍛冶原古墳群があり、未発掘であるものの群集墳であることから古墳時代後期のものと推定される。高田遺跡・大蔭遺跡では、古墳時代後期以降の古代遺物が大量に出土しており、大型掘立柱建物跡などの古代遺構も特記される。両遺跡ともに鍛冶関連遺物が多く出土しており、金属生産を伴った集落であったことが明らかとなっている。また、高田遺跡からは古代の縄釉陶器、皇朝十二銘の一ツ承和昌寶（836年初鋤）、腰帶金具、転用硯等の特殊な遺物も発見されており、当時石見国鹿足郡能濃郷（元美濃郡鹿足郷）と呼ばれていたこの地域の重要な拠点が高田・大蔭地区一帯にあつたものと思われる。

中世津和野の領主吉見氏は、弘安5（1282）年に元寇再防備のため能登国から津和野北部の木部地区に入り、その後14C代に津和野城を構えたと伝えられている。文献では吉見氏入部以前の記録はほとんど残されていないが、これまでの高田遺跡・大蔭遺跡の発掘調査では12・13C代の白磁・青磁が大量に出土しており、吉見氏入部以前に津和野地方に有力者が存在していたことが考古学的証拠によって明らかになっている。高田遺跡・喜時雨遺跡からは、14～16Cにかけての遺構・遺物が多く検出され、津和野城西側の当地に吉見氏関連と推定される武士団集落が存在していたと見られる。なお、中世の津和野城の大手は城の西側、喜時雨遺跡側にあったと伝えられており、近世以降の大手は城の東側、現在の津和野市街地側を向いている。

閑ヶ原の役後、吉見氏は毛利氏に伴い萩に移るが、その後坂崎出羽守の16年間の治領となり、津和野城の大改築・城下町整備など、現在の町並みの基礎となる大事業が行われたと考えられる。その後、亀井氏が因幡国鹿野城（現在の鳥取県鳥取市）より転封された。津和野城下は火災が多く、嘉永6年（1853）には城下の大半が焼失する最大の大火が襲っている。亀井氏は、11代225年間の治世を経て明治維新を迎えることとなる。

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

調査区は、現状の水田ごとに南上側から北下側に向かってA～E区とした。

まず、調査員の立会のもと、表土・基盤土および水田造成土を重機で掘削した。以下は、土層の堆積状況を確認し、遺物の広がりを確認しながら、人力による発掘作業を進めた。出土遺物は原則として2mの小グリッドごとに取り上げた。遺物包含層発掘後には遺構検出をおこない、遺構発掘・写真撮影・図面実測などをおこなった。

なお、記録に用いた基準点は下記のとおりである。

C 2 桁 公共座標日本測地系 X=-170480.000, Y=-35670.000

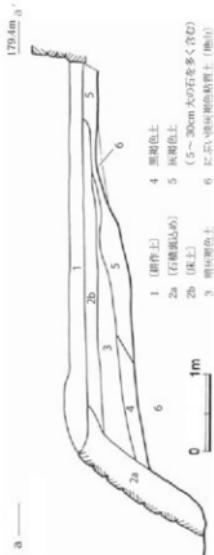
(任意座標 X=20, Y=20)

D 2 桁 公共座標日本測地系 X=-170470.000, Y=-35670.000

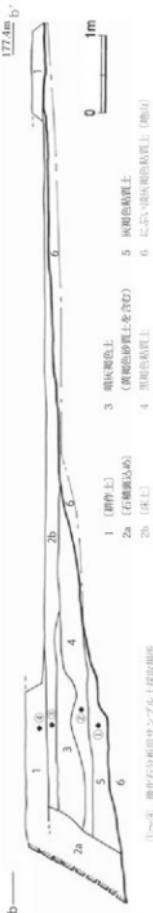
(任意座標 X=30, Y=20)

第2節 層序

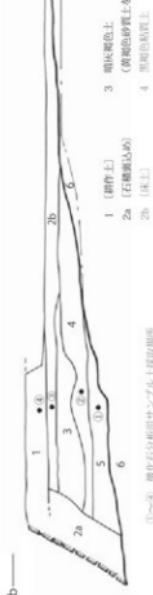
標準的な土層であるC区の土層を例にして、出土遺物から推定される各土層の時期を示すこととする。第1層は現代の水田耕作土である。第2a層は石積裏込め、第2b層は水田床土、第3層は暗灰褐色土で、いずれも近世以降の造成土と推定される。第4層は黒褐色土で古墳時代中期以降と推定される。第5層は灰褐色土で5～30cm大の石を多く含んでいる。第4層の下層である層序からすると、古墳時代前期以前である可能性が高いと思われるが、調査地全体の出土遺物および地山直上層であることを考慮して、弥生時代中期以降から古墳時代前期までの幅をもってとらえておきたい。第6層は地山と見られ、にぶい淡灰褐色粘質土をしている。C・D区の土層を比較すると、土色はほぼ同じで連續した堆積であることが分かるが、地形的により上位であるC区では第4・5層が土質であるのに対し、下位であるD区では水の影響を受けたためか、同層がいずれも粘質土になるという違いがあった。



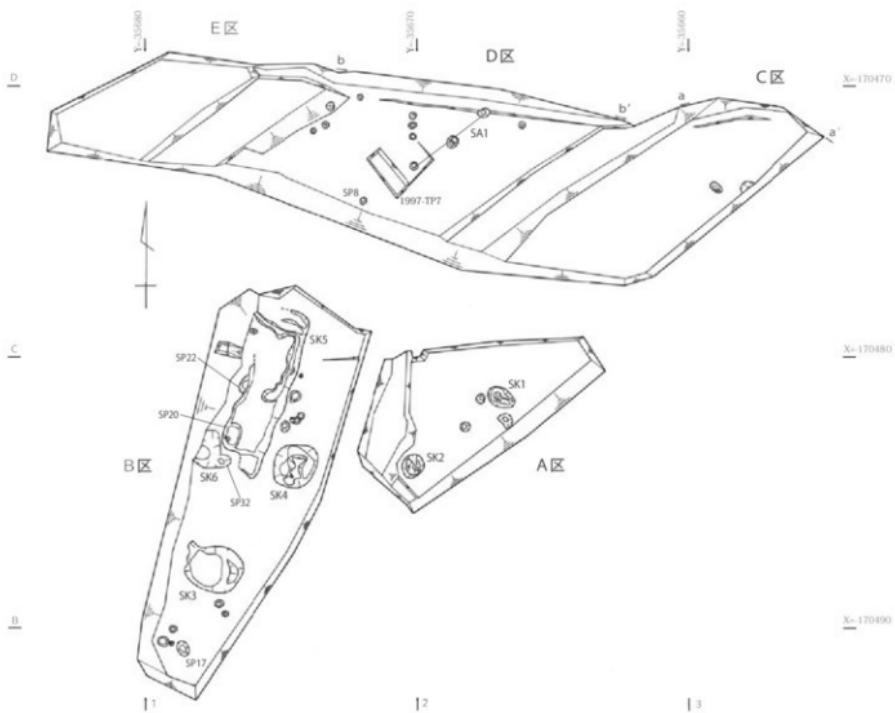
第4図 C区土層断面図 (1/60)



第4図 C区土層断面図 (1/60)



第5図 D区土層断面図 (1/60)



第6図 調査区遺構配置図 (1/180)

第3節 遺構

土坑（SK）を6基、ピット（SP）を36穴（うち柱穴列（SA）を構成するもの3穴）を検出した。土坑はA・B区で検出しており、いずれも出土遺物から見ると近世・近代以降の遺構と推定される。ピットはE区以外の各区から検出している。近世以降の遺物が出土したピットが2穴あるほかは出土遺物がないため時期決定が困難であるが、包含層からの出土遺物量を考慮すると、弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのピットが多く含まれていると推定される。

SA 1

D区で検出した、2間以上の柱穴列である。長さ約3.2m以上、各柱間は約1.6mである。北東側は調査区外に延びるかどうか不明である。南西側に約2.3m離れてSP8があるが、柱間が異なるため同一遺構とは見なさなかった。SA1は、本来は掘立柱建物跡の一辺を構成する柱穴列であり、傾斜地で検出されたため北西側の柱穴が削平された可能性も考えられる。ピット内出土遺物はない。

SK 1

A区で検出した不整楕円形の土坑である。長軸 102cm、短軸 72cm、深さ 16cm を測る。底面は2段掘りになっており、いびつな形状をしていた。出土遺物はない。

SK 2

A区で検出した不整円形の土坑である。長軸 84cm、短軸 80cm、深さ 44cm を測る。底面は東西2カ所で窪み、底付近からはやや扁平な石2個が検出された。南側の石は長さ 32cm、幅 17cm、厚さ 9cm、北側の石は長さ 25cm、幅 15cm、厚さ 4cm の大きさである。出土遺物は焼けた自然木片1点のみである。

SK 3

B区で検出した不整楕円形の土坑である。長軸 220cm、短軸 170cm、深さ 51cm を測る。底面は2段掘りで、東側が浅く、西側が深くなっている。埋土中には約5~25cm程度の石が大量に含まれていた。出土遺物には、近世以降の陶磁器・土師器が含まれていることから近世以降の遺構と考えられるが、弥生~古墳時代の土器・刺片も多く含まれていた。

SK 4

B区で検出した不整円形の土坑である。長軸 180cm、短軸 153cm、深さ 31cm を測る。底面は2段掘りで、中央部がやや高く、その北側外周部がやや低くなっていた。埋土中から 20×15cm 程度の石2個が検出された。出土遺物はない。

SK 5

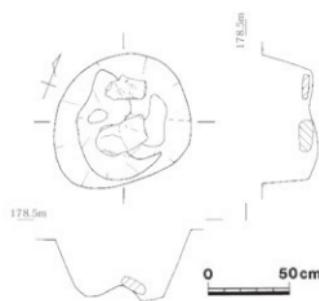
B区で検出した不整長方形の土坑である。長軸 6.2 m 以上、短軸 2.05 m 以上、主要な底面までの深さは約 30~40cm を測る。北西部は石垣裏込めの攪乱によって不明である。SK 5 の西辺は、SP 22 を切っていた。底面は北端で2段、南端で1段が段状にやや高くなっていた。底面北半には逆L字状に曲がる溝があり、北方向に約 3.6 m 延びた後、西方向に 1.9 m 以上延びる。溝の深さは約 8cm を測り、埋土中からは大小 9 個の石が検出された。石は小型のもので約 15cm、大型のもので約 30~40cm の大きさであった。底面の西南部からは、炭が約 90cm 四方の範囲で検出され、その南西隅は SP 20 に切られていた。出土遺物には、近世・近代の陶磁器・土師器・瓦・鉄釘等が含まれていることから近代以降の遺構と考えられるが、弥生~古墳時代の



第7図 SA 1 (1/60)



第8図 SK 1 (1/30)

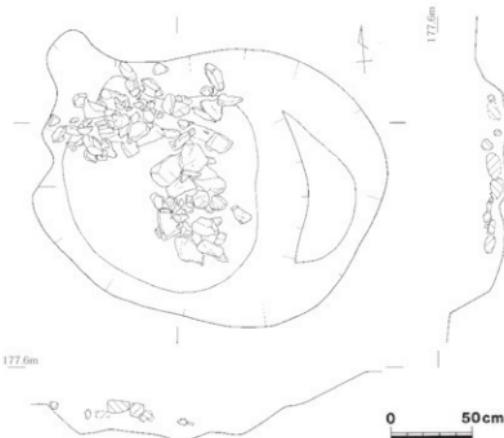


第9図 SK 2 (1/30)

土器・剝片も多く含まれていた。

SK 6

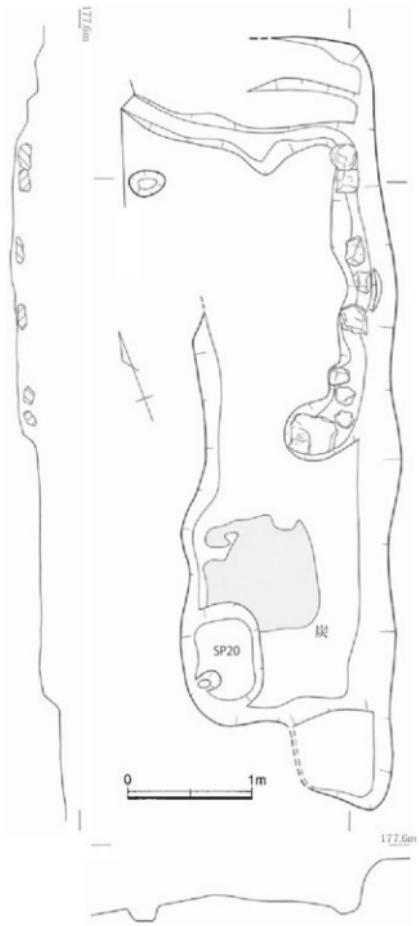
B区で検出した不整形の土坑である。南北140cm、東西95cm以上、深さ27cmを測る。西側は調査区外に続いており、東側にはS P 32があるが切り合いは不明であった。出土遺物には、無釉かと見られる赤色瓦片が含まれていることから近世後半以降の遺構と考えられるが、格子目タタキのある瓦質土器の鍋底片や弥生～古墳時代の土器も含まれていた。



第10図 SK 3 (1/30)



第11図 SK 4 (1/30)



第12図 SK 5 (1/40)



第13図 SK 6 (1/30)

第4節 遺物

遺構出土遺物

SK 3出土遺物（第14図）

1は磁器の紅皿である。幕末以降か2は土師質焼成の脚部で、焜爐類の一部の可能性がある。3は土師器皿の底部で、焼成は良好で硬質である。なお、SK 3埋土から出土した須佐焼鉢片は、SK 5-8と接合したため、SK 5出土遺物として掲載した。

SK 5出土遺物（第15図）

1・2は碗類。いずれも染付磁器である。1は明治以降、2は19C第2四半期以降と考えられる。

3～5は皿類または器台類。3は陶器皿で、4は陶器の灯明受皿である。3・4はいずれも地元産の石見焼。5は土師器皿で、焼成は良好で硬質なものである。

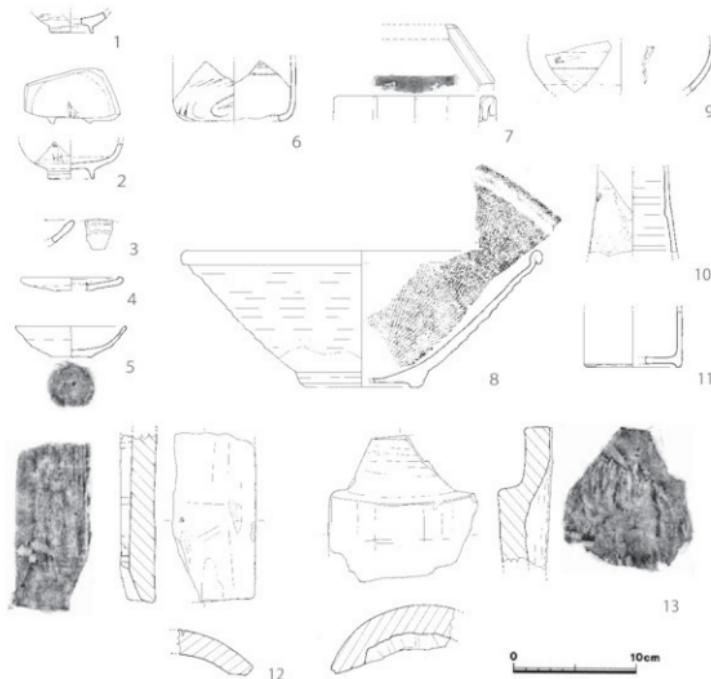
6～8は鉢類。6は染付磁器の鉢で、平面形は正円ではなく変形しており、焼けひずみかと思われる。19C第2四半期以降か。7は土師質焼成の口縁部である。残存部は直線的で両端が屈折しており、平面形は多角形になると見られる。外面には2文字分のヘラ書き文字があるが、残存部が上部のみであるため文字は特定できない。焼成は良好で硬質である。8は須佐焼の擂鉢である。

9～11は瓶類。9は山水土瓶の体部で、外面下部および内面は露胎である。近代か、10は陶器瓶の上半部で、近代の地元産の石見焼かと見られる。11は陶器瓶の底部である。

12・13とも石州赤瓦の丸瓦類である。



第14図 SK 3出土遺物（1/4）



第15図 SK 5出土遺物（1/4）

包含層出土遺物（第16・17図）

第16図1～5は弥生土器。1・2は墺部のある壺、3・5は甕の口縁部、4は底部である。

6～15は土器師。6は小型丸底甕の口縁部、7は甕または鉢の肩部、8・9は小型の手づくね土器、10～15は高環である。

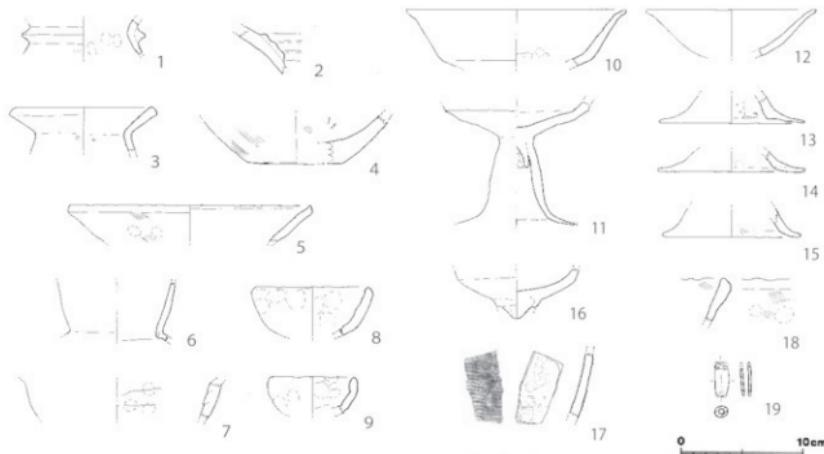
16・17は須恵器。16は高環、17は甕体部である。

18は土師質焼成の中世雜器で、鍋口縁部と考えられる。

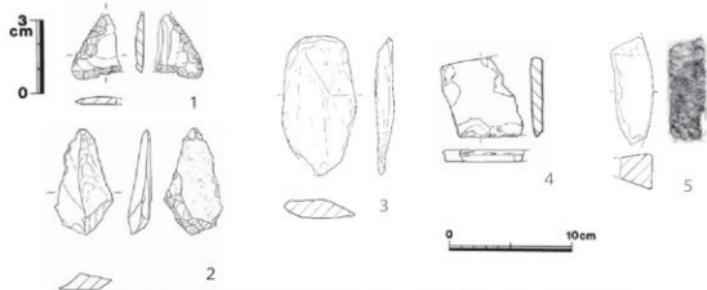
19は土錘。両端を欠いており、残重量は2.78gである。

第17図1～4は弥生時代の遺物に伴う石器と考えられる。1・2は2次加工のある剝片である。1の石材は赤色チャート。2辺には連続した剥離面があり、残る1辺は欠損する。2の石材はサヌカイト類。背面の大半は自然礫面のままである。3は打製石斧で、石材は結晶片岩。4は刃器であり、下辺は刃部となり、一部に使用痕が確認できる。左辺は自然礫面をそのまま利用し、上辺は自然礫面を利用して研磨している可能性がある。右辺は欠損する。石材は頁岩。

5は近世以降の遺物に伴うと考えられる石臼である。石材は角閃石安山岩。



第16図 包含層出土遺物① (1/4)



第17図 包含層出土遺物② (1・2:1/2、3~5:1/4)

第1表 遺物觀察表

第4章 自然科学分析

丸山遺跡における自然科学分析

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント（株））

はじめに

本報告は文化財調査コンサルタント株式会社が、丸山遺跡周辺の植生変遷（特に水田の有無）、堆積環境変遷などの古環境変遷を推定するために、津和野町（津和野町教育委員会）から委託を受け、実施・報告した調査報告書の概報である。

丸山遺跡は鹿足郡津和野町森村地内に立地する遺跡である。

分析試料について

図1の調査区平面図上に試料採取地点を示す。また、試料採取地点の模式柱状図及び試料採取層準は、図2の花粉ダイアグラム中に示した。



分析方法

(1) 花粉分析

渡辺（2010a）にしたがって分析処理を行った。花粉化石の同定は、光学顕微鏡下（400～1000倍）で観察し、200粒以上の木本花粉化石の検定、計数を試みた。

(2) 微化石概査

花粉分析用プレパラート及び分析残渣について、花粉の外、植物片、炭、珪藻、火山ガラス、植物珪酸体の含有状況を観察した。

図1 試料採取地点

分析結果

(1) 花粉分析

花粉分析結果を図2、表1に示した。花粉ダイアグラムでは、計数した木本花粉を基数にし、各々の木本花粉、草本花粉について百分率を算出してスペクトルで表した。ただし、試料No.2では花粉化石の含有量が少なく、統計処理に十分な量の花粉化石が検出できなかった。このために、検出できた種類を「＊」で示した。このほか、木本花粉を針葉樹花粉、広葉樹花粉に細分し、これらに草本・藤本花粉、胞子の総数を加えたものを基数として、分類群ごとに累積百分率として示した総合ダイアグラムを示している。またイネ科について、中村（1974）にしたがって、イネ属（*Oryza*）を含む可能性の高いイネ科（40ミクロン以上）と可能性の低いイネ科（40ミクロン未満）に細分した。

(2) 微化石概査

微化石概査結果を表3に示した。花粉、植物片、炭、珪藻、火山ガラス、植物珪酸体の含有状況を5段階で表した。



図2 花粉ダイアグラム

花粉分带

花粉組成の特徴、及び各層の対比から、以下のように地域花粉帯を設定した。以下に各花粉帯の特徴を示す。また、本文中では花粉組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載し、試料Noも下位から上位に向かって記した。

(1) II帶：試料No 1、3

マツ属(複維管束亞属)が卓越し、スギ属がほかの種類に比べ高率を示す。草本花粉では、栽培種であるイネ科(40ミクロン以上)、ソバ属のほか、カヤツリグサ科、イネ科(40ミクロン未満)、アブラナ科、タンポポ亜科が高率を示す。

花粉化石の含有量、マツ属（複維管束亞属）、スギ属の出現傾向から、下部の b 亜帶（試料 No.1）、上部の a 亜帶（試料 No.3）に細分した。

(2) I 帶：試料No. 4

マツ属（複維管束亜属）、スギ属がともに高率を示す。草本花粉ではイネ科（40 %以上）が高率を示す。

堆積時期の推定

II带 b亜帯の層準は、弥生時代中期～古墳時代前期の堆積層であると考えられていた。一方、津和野町内（大蔭遺跡）で得られていた花粉分析結果では、縄文時代晚期以降中世頃までスギ属が卓越することが特徴であった（渡辺、2010b）。今回の分析結果は、近世～近代の花粉組成の特徴を示している。ただし、大蔭遺跡は谷沿いでありスギの生育に適していたが、今回の調査地点は丘陵斜面でスギの生育に適しているとは言えないことから、局地的な植生としてマツ属（複維管束亜属）が卓越した可能性も残る。

表 1 花粉組成表

登録番号	品目	A	B	C
2-Alkene	オレフィン	10	10	10
Alkylbenzene	アリル・フェニル系化合物	121	121	14
Alkyl	アルキル	1	1	1
Alkane	パラaff	1	2	2
Zocotocine	ココシヤマホウ	29	29	29
Alkene	アルケン	108	108	28
	アルキル	108	108	28
	アルキル	478	98	28
27-Carboxylic	カルボ酸	2	2	2
Alk	アルキル	1	1	1
Alkyl	アルキル	1	1	1
Alkylbenzene	アリル・フェニル系化合物	105	105	105
Alkyl	アルキル	105	105	20
Alkene	オレフィン	14	14	1
Alkene衍生物	オレフィン誘導体	25	85	35
	オレフィン	2	2	2
Alkene	オレフィン	15	15	15
Alkene	オレフィン	4	10	12
Alkene	オレフィン	10	10	10
Alkene(alkene)	オレフィン・アルケン(オレフィン)	20	20	11
Alkene(alkene)	オレフィン・アルケン(オレフィン)	255	105	105
Alkene(alkene)	オレフィン・アルケン(オレフィン)	112	112	1
	オレフィン	485	485	105
285-Resinoides	ポリマー樹脂	16	4	2
	オレフィン	16	26	26
271-Thiophene	カラミツラヒラ	10	10	10
	アブチナフチ	10	10	10
285-Carboxylic	カルボン酸	75	105	105
285-Carboxylic	カルボン酸	75	105	105
285-Carboxylic	カルボン酸	4	22	22
285-Carboxylic	カルボン酸	25	25	25
285-Carboxylic	カルボン酸	16	26	26
285-Ethoxymethyl-Pivalate	カルボン酸ジメチルエーテルエチルエーテル	10	10	3
285-Pentene	オキニン	10	10	10
285-Pentene	オキニン	10	10	10
287-Juice	カラシノニアガラ	1	1	1
285-Lanosterol	シロノ	10	10	10
285-Lanosterol	シロノ	10	10	10
285-Lanosterol	シロノ	3	20	3
285-Lanosterol	シロノ	10	10	10
285-Lanosterol	シロノ	1	7	14
285-Lanosterol	シロノ	10	10	10
285-Lanosterol	シロノ	25	25	25
402-MONOLATE-TYPE-SPIRE	モノラート	28	105	52
403-TRIALATE-TYPE-SPIRE	トリラート	175	105	105
	トリラート	15	15	15
本邦未登録物		250	140	70
本邦未登録物		305	205	145
本邦未登録物		375	375	75
本邦未登録物		375	375	75
本邦未登録物		440	120	70

表2 微化石概査結果

試料	花粉	植物片	炭	珪藻	火山ガラス	プランツ・オバール
4	◎	◎	○	◎	△×	○
3	○	△	△	○	△	◎
2	△×	×	◎	△	○	◎
1	△	○	○	○	○	◎

凡例 ◎：含有量がきわめて多い ○：含有量が多い

△：含有量が少ない ×：検出できない

耕作の可能性

花粉ダイアグラムにスペクトルで示した3試料のいずれからも、イネ属を含む可能性の高い（中村, 1974）イネ科（40ミクロン以上）が高率で検出されている。また、試料No.1、3からはソバ属も検出されるなど、調査地点近辺で稲作、蕎麦作が行われていた可能性が指摘できる。ただし、試料No.1では雑草を含む可能性が高い（中村, 1974）イネ科（40ミクロン未満）も高率で検出されるなど、否定的要素もある。

含有物概査結果を検討すると、これら3試料からは珪藻化石（炭水・底生種である *Pinnularia* 属などが目立つ）が多く含まれ、いずれも湿地環境での堆積が推定される。したがって、これらの層準で稲作が行われていた場合、水田であった可能性が高い。

一方、試料No.1では紫外線による劣化を受けたと考えらる花粉粒が残り、炭片も多く含まれるなど、乾燥環境下での「土壤化」を連想させる。また、試料No.2では花粉化石がほとんど検出されず、炭片が多量に検出されている。

したがって、試料No.1層準は乾湿を繰り返す。あるいは、開墾した際に耕土として旧表土が取り込まれた可能性がある。

試料No.2層準はあきらかにほかの層準と環境が異なり、「古土壤」と考えられる。

環境変遷

ここでは、花粉帶毎に遺跡周辺の古環境を推定する。

(1) II带期

前述のようにb亜帯は、二時期の内、いずれかの花粉化石群集を示している可能性が指摘される。このため、木本花粉組成から周辺の森林植生を推定することを止める。

a亜帯ではマツ属（複維管束亜属）が卓越し、アカマツ林が周辺に広がっていたことがわかる。近世以降の堆積物であることがわかっており、いわゆる「里山」「薪炭林」が山地斜面に広がっていたと考えられる。

また試料No.1、3層準堆積時期に調査地は水田であった。ただし、試料No.1層準については否定的要素もある。一方試料No.2層準堆積時期には、土壤化が進む荒地であったと考えられる。

(2) I带期（現代）

イネ科（40ミクロン以上）が高率を示し、水田が広がり現在の景観に近い状態になっていたと考えられる。

木本花粉ではスギ属が高率になり、スギの植林が行われていったと考えられる。

まとめ

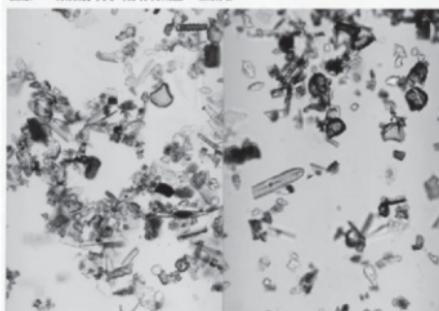
津和野町丸山遺跡において花粉分析、含有物概査を行い、以下のことを考察した。

- (1) 試料No.1 層準は、乾湿を繰り返す環境であったと考えられる。一方で、表土（古土壤）が耕作土に取り込まれた可能性もある。さらに、同層準で水田耕作が行われていた可能性もある。
- (2) 試料No.3、4 層準は、水田として利用されていた可能性が高い。今後、プラント・オパール分析により、追従する必要がある。
- (3) No.2 層準は、土壤化が進む荒地で堆積したと考えられる。
- (4) 含有物概査の結果、いずれの試料からもプラント・オパール化石、珪藻化石が検出された。今回の考察内容確認のため、今後、全試料を対象としてプラント・オパール分析を、試料No.1、3、4を対象として珪藻分析を実施する必要がある。

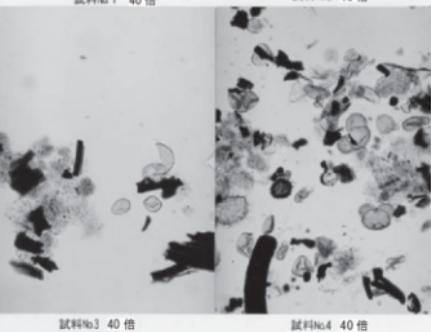
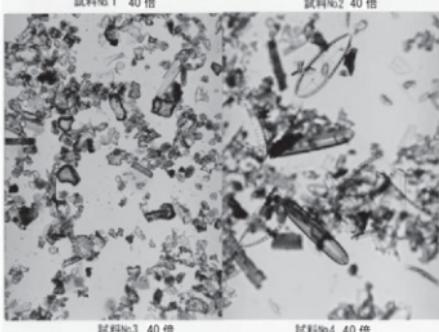
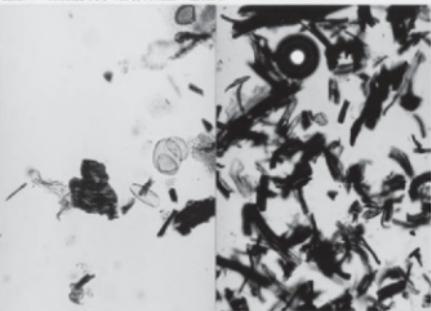
引用文献

- 中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネを中心として、第四紀研究、13, 187-197.
渡辺正巳(2010a)花粉分析法、必携 考古資料の自然科学調査法、174-177. ニュー・サイエンス社.
渡辺正巳 (2010b) 大蔭遺跡における自然科学分析、大蔭遺跡 - 第1・2・4・7・8次発掘調査報告書-, 津和野町埋蔵文化財報告書、14、155-163、津和野町教育委員会.

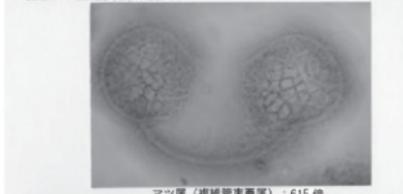
図版1.顕微鏡写真(含有物概査・珪酸質)



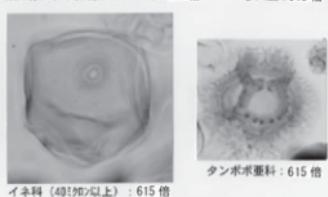
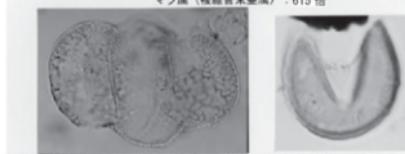
図版2.顕微鏡写真(含有物概査・植物質)



図版3.顕微鏡写真(花粉1)



図版4.顕微鏡写真(花粉2)



紫外線により劣化したマツ属(複殖管束型) : 410倍 スギ属 : 615倍

ハンノキ属 : 615倍 コナラ亜科 : 615倍

キツネノマゴ属 : 615倍 シソ科 : 615倍

キツネノマゴ属 : 615倍 シソ科 : 615倍

イネ科(400倍以上) : 615倍 タンボボ亜科 : 615倍

キク亜科 : 615倍

第5章 総括

丸山遺跡は青野山西麓にあり、北西に津和野川を望む比高約20mの段丘上に位置している。寛永14年（1637）頃の開発という、いわゆる「主水煙」と呼ばれる棚田（沖本1976）の一角に当たる場所である。

津和野高等学校教諭であった岩谷建三氏や、同校郷土部員による踏査によって、石礫をはじめとした石器・土器が表採されており、周知の遺跡として古くから認識されてきた（岩谷1964・1970、杉1964、益成1963）。これまでの踏査では、丸山遺跡からその南西にある畠田地区までの範囲で、弥生・古墳時代にかけての石器・土器が表面採取されていた。

今回の調査地では弥生時代中期から古墳時代中期にかけての遺物が出土しており、丸山遺跡は小規模ながらも比較的長期間にわたる遺跡であることを確認することができた。調査区内では竪穴住居跡や掘立柱建築跡を確認することはできなかったが、今回の調査地の北東側で2003・2004年度におこなわれた畠田地区急傾斜地崩壊対策事業の立会においても同様の時期の遺物を採取しており、周辺には同時代の住居跡等の遺構が存在している可能性が高いと考えられる。

また、近世末～近代の遺構・遺物も検出しているが、SK5のように遺物が混在して出土しており、丸山遺跡は近世が主体ではないようである。津和野城下を描いた絵画の多くでは、調査地点付近は城下町の外部ないしは縁辺に当たっていると見られ、遺跡の発掘状況からも城下町の主要部でないことが裏付けられたと言える。

なお、本報告書掲載の包含層出土遺物の中には中世以降の土師器鍋が1点あり、また未掲載であるがSK6出土遺物の中に混じって、格子目タキのある瓦質土器の鍋底片も出土している。丸山遺跡の北東側に残る字名「大岩」は、永正16年（1519）の「野上領中領社頭祭礼式法」に見える「大岩」に関する地名である可能性が指摘されており（沖本1970）、今後の調査では弥生・古墳時代のみならず、これらの出土遺物や文献史料が示唆する中世以降の村落の存在にも注意する必要がある。

（参考文献）

- 岩谷建三 1964 「郷土部の関係した出土品」『石片』第十号 島根県立津和野高等学校郷土部
岩谷建三 1970 「遺物（遺跡）が語る集落の発生」『津和野町史』第1巻
沖本常吉 1970 「中世村落と荘園制の面影」『津和野町史』第1巻
沖本常吉 1976 「兵・農分離を忘れた土地政策の展開」『津和野町史』第2巻
杉 源嗣 1964 「森の丸山からの出土品」『石片』第十号 島根県立津和野高等学校郷土部
益成 繁 1963 「変電所上の出土品」『石片』第九編 島根県立津和野高等学校郷土部

1991年9月11日撮影



丸山遺跡周辺の航空写真（南より）
(調査地は矢印の交点付近)

図版 2



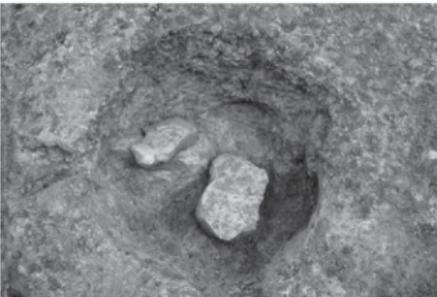
調査前（北東より）



調査前（西より）



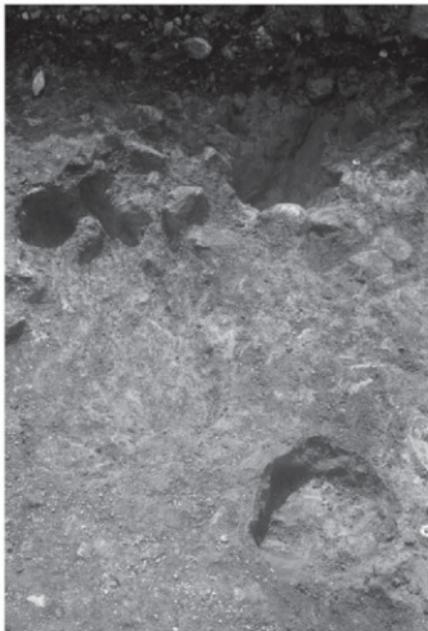
表土除去工事風景（北東より）



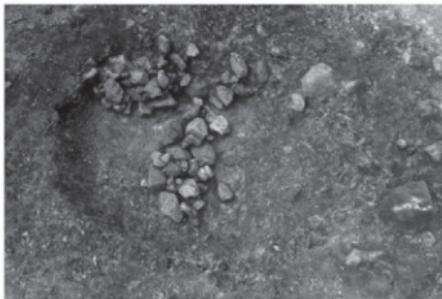
A区SK2発掘状況（南西より）



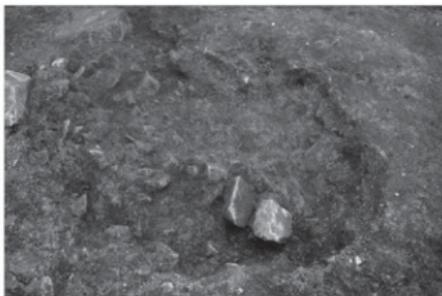
A区完掘状況（東より）



A区SK 1、SP 13・15発掘状況（北西より）



B区SK 3発掘状況（南より）



B区SK 4発掘状況（南東より）



B区SK 5発掘状況（北より）



B区SK 5発掘状況（東より）



B区SK 5発掘状況（西より）

図版 4



B区完掘状況(北より)



B区SK5東辺の列石（南西より）



C区検出状況（北東より）



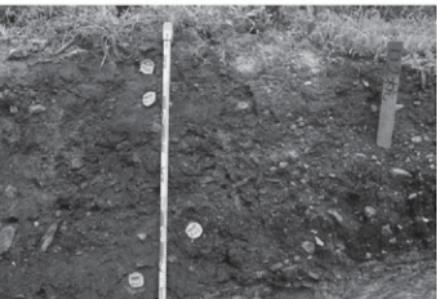
D区発掘作業風景（西より）



D区遺構検出状況（北東より）

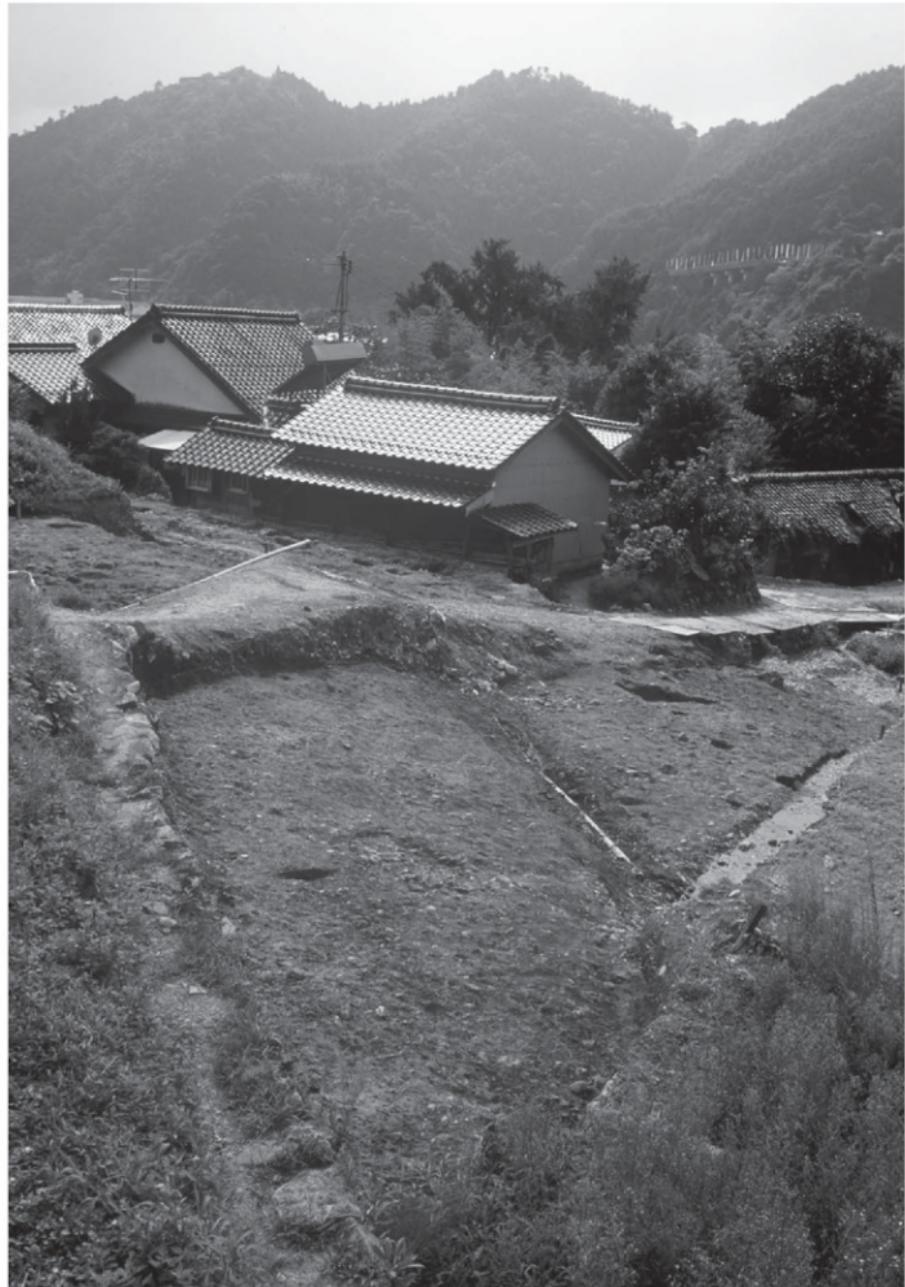


D区北壁土層断面（南西より）

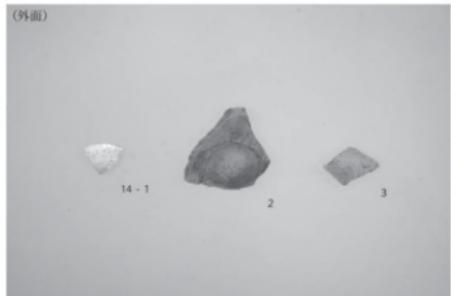


D区微化石分析サンプル土採取地点（南より）

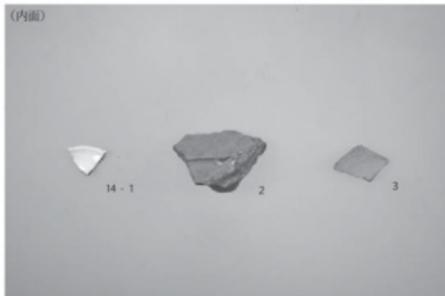
図版 6



全区完掘状況（北東より）



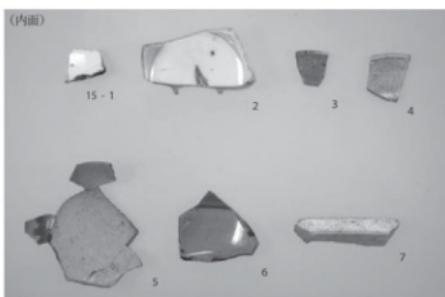
SK 3出土遺物



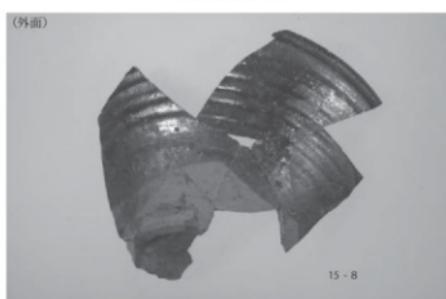
SK 3出土遺物



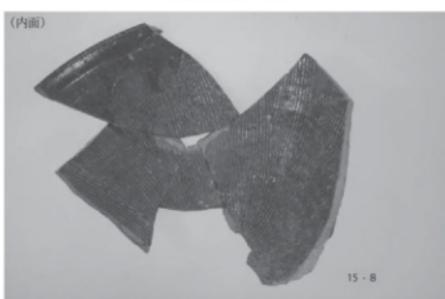
SK 5出土遺物



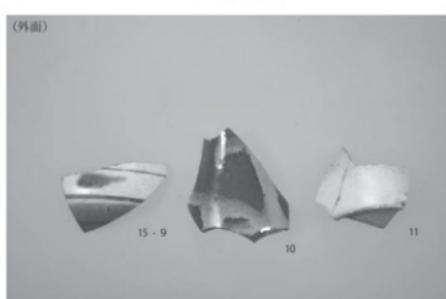
SK 5出土遺物



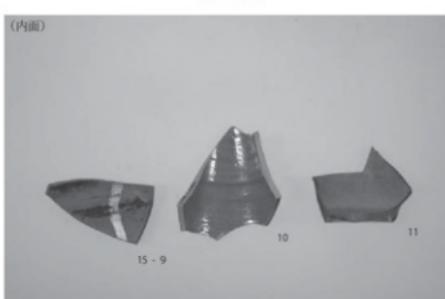
SK 5出土遺物



SK 5出土遺物



SK 5出土遺物



SK 5出土遺物

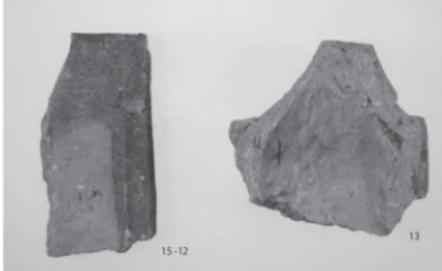
図版 8

(表面)

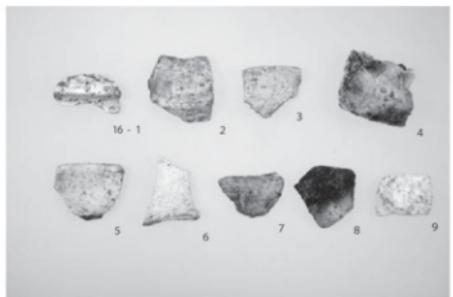


S K 5 出土遺物

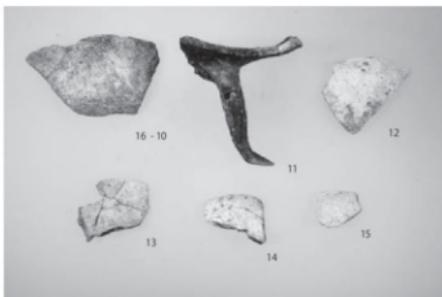
(裏面)



S K 5 出土遺物



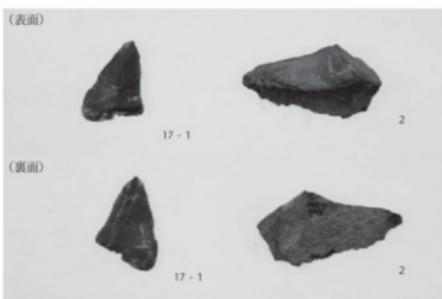
包含層出土遺物



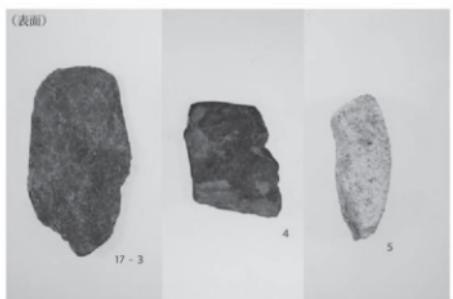
包含層出土遺物



包含層出土遺物



包含層出土遺物



包含層出土遺物



包含層出土遺物

報告書抄録

ふりがな 書名	まるやまいせき 丸山遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	津和野町埋蔵文化財報告書							
シリーズ番号	第18集							
編著者名	宮田健一、文化財調査コンサルタント㈱							
編集機関	津和野町教育委員会							
所在地	〒 699-5605 島根県鹿足郡津和野町後田口 64-6 TEL 0856-72-1854							
発行年月日	2012年3月21日							
ふりがな 所取 遺跡	ふりがな 所在地		コード 市 町 村	(世界) 北緯 ° °	(世界) 東経 ° °	調査 期間	調査 面積 m ²	調査 原因
丸山遺跡	島根県鹿足郡 津和野町森村		W 11	34 度 27 分 57 秒	131 度 46 分 33 秒	20010718 ~ 20020331	298	町道 改良 工事
所取 遺跡	種別	主な 時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
丸山遺跡	集落跡	弥生 古墳 近世 近代	柱穴列・柱穴 土坑・集石・炭		弥生土器 土師器 石製品 陶磁器 金属製品			

(要約)

丸山遺跡は、津和野川に面した比高約 20 m の段丘斜面上に位置する遺跡である。包含層からは、主に弥生時代後期から古墳時代中期にかけての遺物が出土した。また、近世～近代の集石を伴った土坑も検出された。

津和野町埋蔵文化財報告書 第 18 集

丸山遺跡

2012(平成 24) 年 3 月 21 日

編集 津和野町教育委員会
島根県鹿足郡津和野町後田口 64-6

印刷 大村印刷株式会社
山口県防府市西仁井町 1-21-55